



たんぽぽ

戸田市立喜沢小学校

令和7年8月25日 8・9月号

【学校教育目標】

「夢と希望をもち、
よりよい社会づくりに向け
行動する児童の育成」

問いから始まる学び

ーことばで未来をひらく子供たちへ研究開発学校としての挑戦

校長 加藤 貴嗣

新しい学期を迎え、子供たちが未来に向けて学びを広げていく姿に、大きな期待を抱いています。

本校は今年度から令和10年度までの4年間、文部科学省から研究開発学校の指定を受け、「私は何をしに学校へ？」という問いを子供たち自身が見つめ、その答えをもてるようにするためのカリキュラム開発に取り組んでいます。

特に力を入れているのは、教科の本質をとらえた「主体的・対話的で深い学び」となる授業づくりです。子供たち一人ひとりの理解や関心に応じて学びを深めると同時に、仲間と意見を交わし、考えを広げ合うことで、自分にはなかった視点を得られる授業を目指しています。

その一例として、国語の授業をイメージしてみてください。従来の国語の学習といえば、「本文を読んで設問に答える」「漢字や語句を覚える」といった学習をイメージされる方が多いと思います。かつての「読解力」とは、作者の意図や内容を正しく読み取り、模範解答に近い答えを書く力を指していました。例えば、物語文では「登場人物の気持ちを選択肢の中から選ぶ」、説明文では「段落ごとの要旨を答える」といった形です。もちろん、こうした力は今も大切です。

しかし、今の子供たちに必要となる、これから求められる「読解力」はそれにとどまりません。文章を多角的に解釈し、根拠を示しながら自分の考えを組み立て、他者と伝え合う力が必要です。例えば、物語文なら「なぜその人物はその行動をとったのか」を自分なりに考え、本文の根拠を示しながら友達と意見交換する。説明文なら、筆者の主張を踏まえて「自分ならどう考えるか」「現実社会の問題とどうつながるか」を話し合う。こうした学びを通じて、子供たちは「ことば」を使って世界と向き合い、自分自身の考えを表現する力を育んでいきます。

本校ではそのために、PBL（プロジェクト型学習）の考え方を取り入れています。教材文から自分なりの問いを立て、調べ、仲間と議論し、最後に自分の言葉で表現する探究的な学びを展開しています。ICTの活用により、調べ学習や意見の可視化が進み、子供たちの思考の広がりはいくら以上に豊かになっています。

こうした新しい学びは、未来社会を生きる子供たちにとって欠かせない力につながります。AIやデジタル技術が急速に進展する時代に必要とされるのは、単に知識を身につけることにとどまらず、「問いを見つける力」「多様な仲間と協働して考える力」「自分の言葉で発信し、他者とつながる力」です。本校が目指している国語の探究的な学びは、まさにその力を育むための実践となります。

こうした学びを支えるために、ご家庭でもできることがあります。

例えば、子供が読んだ本やニュース記事について「どんなところが面白かった？」「あなたならどう思う？」とたずねてみることです。正しい答えを求める必要はありません。子供が自分の感じたことや考えを言葉にし、大人が「そういう考え方もあるんだね」と受け止めるだけで、学びは大きく深まります。また、家族との会話の中で、出来事に「なぜ？」「どうして？」と問いを投げかけることも効果的です。こうした小さなやりとりが、学校での探究的な学びとつながり、子供たちの考える力を豊かにしていきます。

誰一人取り残されない学びを保障しながら、子供たちが自らの学びを語り、未来を切り拓く力を育んでいきたいと考えています。

「私は何をしに学校へ？」

この問いに子供たちが自分の答えを見いだせるように、本校は研究開発学校として、新しい国語の学びをとおして、未来社会に必要な力を育み続けてまいります。

保護者・地域の皆様にも、引き続きご理解とご支援をお願い申し上げます。